中世土師器研究ノート (1)

— 朝日西遺跡の様相 —

佐 藤 公 保

1 はじめに

本稿では、朝日西遺跡出土の供膳形態の土師器に見られる様相について検討を試みたい。なお、今回は朝日西遺跡でⅠ期(1)とする12世紀から14世紀にかけての土師器を対象とする。Ⅰ期以降は次稿に譲りたい。

2 形態分類

朝日西遺跡から出土した供膳形態の土師器は、そのほとんどが器高に対して口径が大きい皿タイプである。

これらは成形法で以下の２つに分類できる。

A類　ロクロ成形のもの

B類　手捏ね、又は、型押しによる非ロクロ成形のもの。

さらに、形態、調整、法量等で以下のように分類できる。

A_1類――体部下部はやや丸味をもって外反し、口縁部は直立気味である。体部内外面ナデ調整、底部には回転糸切り痕を残す。口径13.0cmから14.0cm、器高4.0cmから4.5cmを測る。胎土は砂混じりで、クサリ礫と言われる赤色粒が見られ、明橙色を呈するものが多い。

A_2類――底部が肥厚し、突出している。体部は直線的に開き、浅い。調整は体部内外面にナデを施す。底部には回転糸切り痕を残す。口径9.3cmから7.3cm、器高2.3cmから2.0cmを測る。砂混じりの白橙色の胎土を持つ。

A_3類――A_2類と同様な底部を持つ。底部から体部にかけては、やや湾曲しながら立上がり、口縁部は直立気味に外反する。体部内外面共にナデ調整。底部に回転糸切り痕を残す。口径7.6cm、器高2.6cm。砂混じりの明橙色の胎土を有する。

A_4類――体部下部に稜を持ち、口縁部はやや外反する。体部内外面にナデ調整を施し、底部に回転糸切り痕を残す。口径7.4cm、器高1.6cm。胎土は、砂混りで赤色粒が混入し、明橙色を呈する。

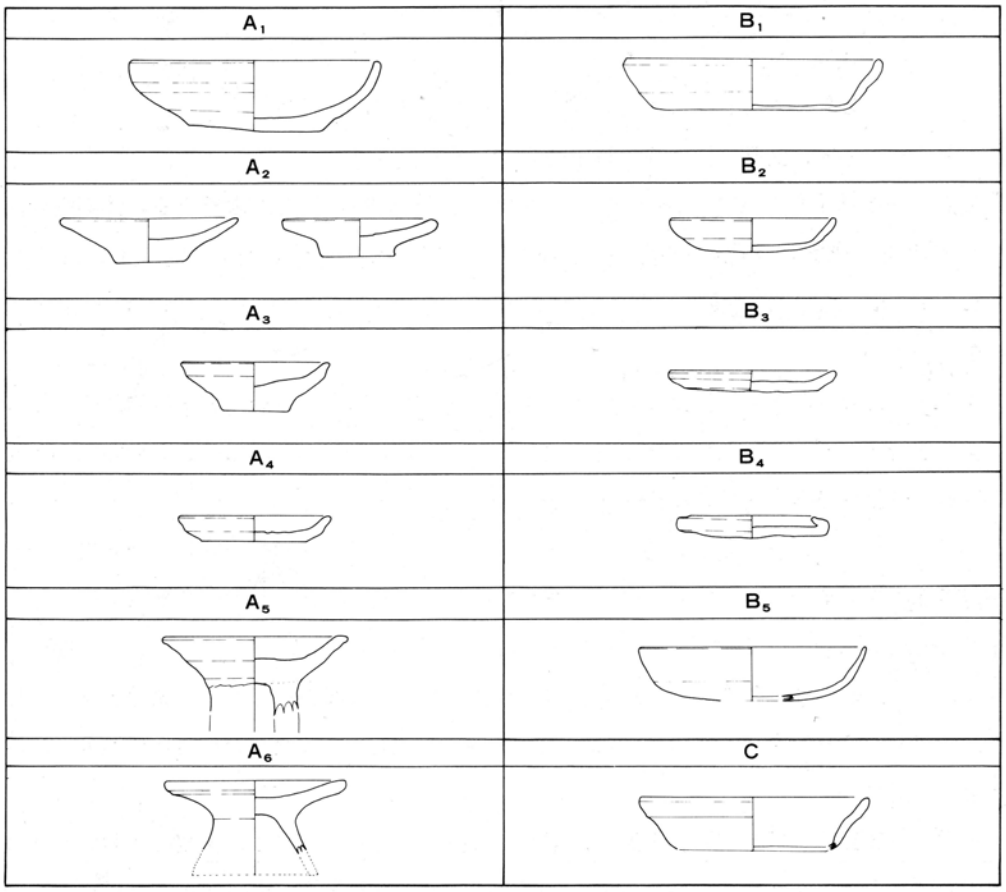
A_5類――高杯。杯部は浅く、直線的に開く。口縁部は丸く突き出て、上端面は面取りされている。脚部は棒状で、中空である。脚部下端には、杯部と同形の裾がつくと思われる(2)。

体部内外面にナデ調整を施す。杯部外底面に回転糸切り痕が残存する。脚部外面に杯部との接合痕を残す。口径9.0cm、杯部高2.5cm。明橙色の胎土を持つ。

A_6類――高杯。浅い受け皿状の杯部に「ハ」の字状の脚部がつく。内外面共にナデを施す。口径9.6cm。胎土は白橙色を呈する。

B_1類――体部中ほどに稜を持ち、口縁部は丸味を持ち、わずかに内湾する。又は、断面三角形を呈する。底部から体部外面下位までは、一定せず凸凹であり、無調整である。体部上位から口縁部にかけ、強い横ナデが施される。内面には見込みに横ナデを施した後、体部内面に外周に沿った横ナデを施す。また内面の体部と見込みの境に、体部を引きおこすための指圧痕が残るものもある。口径14.0cmから11.0cm、器高3.0cmから2.2cmを測る。砂混じりの橙色を呈する胎土を持つものが多いが、赤色粒が混入するもの、明橙色、白橙色を呈する胎土を持つものも見られる。

B_2類――形状、調整、胎土共に、B_1類と同一で、B_1類が小型化したもの。口径9.2cmから7.2cm、器高2.1cmから1.6cmを測る。



第1図　供膳形態分類　　1：4

B_3類――B_2類に比べて、口径に対し器高が著しく低くく、扁平な形を呈する。B_1類と同様な調整が施される。口径8.6cmから7.6cm、器高1.8cmから1.2cmを測り、胎土は砂混じりで褐色を呈するものが多い。

B_4類――体部は短く直線的に立上がり、口縁部が内側に折れ、断面「コ」の字状を呈する。B_1類と同様な調整が施される。口径7.0cmから6.5cm、器高1.8cmから1.5cmを測る。胎土は砂粒を含み、橙色を呈するものが多い。

B_5類―底部は丸味を帯び、口縁部は内湾する。内外面ともB_1類と同様な調整を施すが、B_1類に比べ器壁が薄い。口径12cmから14cm、器高2.7cmから3.0cmを測る。白橙色の精選された胎土を持つ。

3　時期設定

この分類をもとに、朝日西遺跡の中で比較的、まとまった数で土師器が出土しているⅠ期の遺構を抽出し、各土師器の遺構毎の出土状況を見た。その結果は第1表の通りである。この表から、A類とB類は一部混在する遺構があるが、基本的にはA類が出土した遺構とB類が出土した遺構とに分れることが伴る。これには、ロクロ成形の土師器と非ロクロ成形の土師器とでは、各々が主体を占める時期が異なることが考えられる。A・B類と他地域の土師器を比較してみると、A_2・A_3類は関東西部から中部全域に見られる、所謂「柱状高台」の皿である(3)。坂本美夫氏は、A_2類を11世紀前半から11世紀末までの時期にA_3類を12世紀中葉から12世紀末葉までの時期に比定している(4)。又、A_6類の高杯は、斎宮跡で類似しているものが認められ、時期は12世紀前半から12世紀中葉に比定している(5)。

B類については、形態、調整共に旧京都市街で出土する土師皿と類似する(6)。特に、B_1・B_2類は横田洋三氏の言う「A_2・A_3タイプ」の褐色系皿に、B_4類は「受け皿」と言われる「Dタイプ」のものに、B_5類は「B_1タイプ」の白色系皿に類似する(7)。「A_2タイプ」は12世紀から13世紀

分類＼遺構	SK238	SK13	SK65	SD25 (SD09)*	SK17	SK11	SK235	SD72	SK35	SK233	SK10	SK20
A_1		○	○	○								
A_2	○											
A_3			○									
A_4				○								
A_5		○										
A_6				○								
B_1			○		○	○	○	○	○	○	○	○
B_2				○	○	○	○	○	○	○	○	
B_3					○		○		○	○	○	○
B_4							○			○		
B_5				○	○							

第1表　遺構出土状況

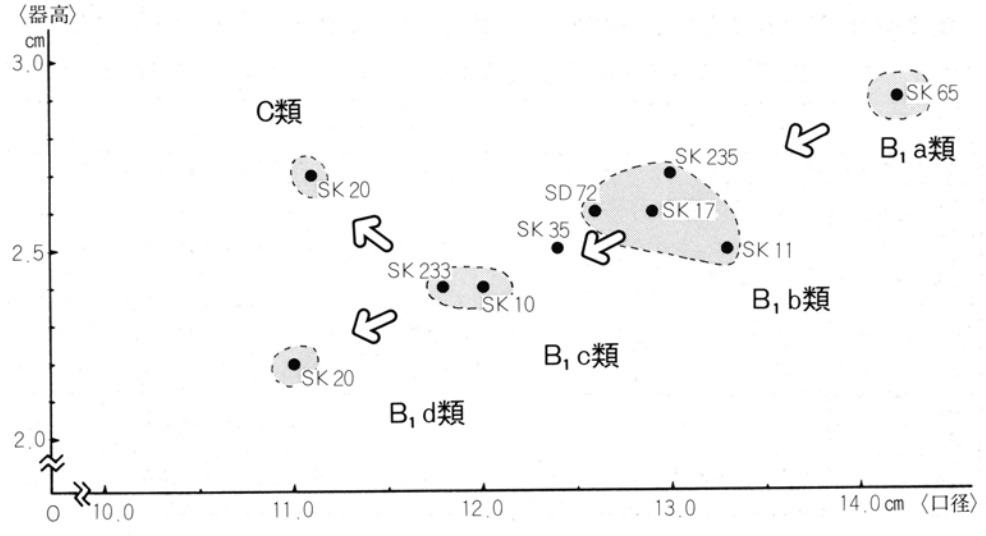
＊SD09（朝日西57・58）は、SD25（朝日西60G）と同じ溝

後半まで、「A_3タイプ」は12世紀後半から15世紀後半まで存続する。旧京都市街で見られる土師皿群と同一形態、同一調整、同一組成を取る朝日西遺跡のB類の土師器は、旧京都市街の土師皿に何らかの影響を受け成立したと思われ、旧京都市街でA_2タイプ」が出現する12世紀前半以降、それに近い時期に朝日西遺跡でB_1類が出現すると考えられる。このように、他地域との関連から、A類は11世紀から12世紀代いっぱいまでの時期に、B類は12世紀以降の時期に出現すると考えられ、前述したA類とB類の前後関係は、A類がB類に先行し、A・B類混在の時期を至て、B類が主体を占める時期に至ることになる。又、第1表を見ると、B類のみを検出した遺構数は、A類を検出した遺構数を凌いでいる。このことはB類が12世紀以降に出現することを考えると、朝日西遺跡が12世紀から13世紀にかけてピークを向えることと矛盾しない(8)。

次に、朝日西遺跡がピークを向える12世紀以降出現すると考えられるB類の検討を進める必要がある。そこで全ての抽出遺構に見られ、B類の主要構成要素であるB_1類にスポットをあてていく。

第2表は、B_1類の各遺構毎の口径、器高の平均値を求め、それを基にして作成したグラフである(9)。表から、SK65（朝日西遺跡59年G区、以下、朝日西59Gと略す。）は、口径14cm強、器高3cm前後に、SK17、SK235、SD72(以上、朝日西59E)、SK11（朝日西60B）は、口径12cm前後、器高2.6cm前後に、SK233（共に朝日西59E)、SK10（朝日西60B）は、口径12cm前後、器高2.4cm前後になり、ある一定の法量値毎に、遺構が集中する傾向がある。各法量に近似する値を持つB_1類を以下の様に細分する。

B_{1a}類——口径14cm強　器高3.0cm前後



第2図　B_1類法量

B_{1b}類――口径13cm前後、器高2.6cm前後

B_{1c}類――口径12cm前後、器高2.4cm前後

ところで、中世の雑器である土師器、瓦器、灰釉系陶器等の供膳形態は、法量が発生以降、減少していくことが知られている。B類に影響を与えたと考えられる旧京都市街出土の土師皿も同様な傾向をたどる(10)。

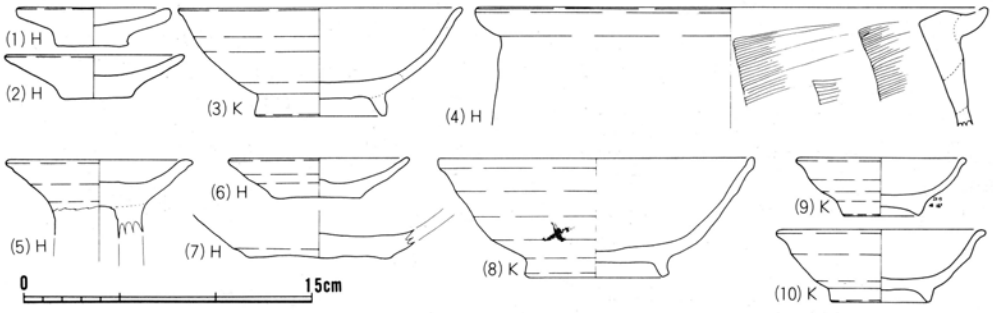
このように、中世雑器全般に通じて、法量減少化が見られること、B類に密接な関係があると思われる旧京都市街の土師器群も例外ではないことから、朝日西遺跡で12世紀以降出現すると考えられるB_1類も同様な傾向をたどると考えられる。即ち、B_{1a}類からB_{1c}類への変化は時期差として捉えられる。なお、少量ではあるがSK20（朝日西59C）出土の土師器（第4図）は、B_1類を通して見られる法量減少の傾向の中で捉えられるものと、器高が増大し椀に近い形態を取るものが見られる。前者は口径11.0cm、器高2.2cmを測り、B_1類と同一系統のものとして捉え、B_{1d}類とする。後者は平均値で口径11.1cm、器高2.7cmを測り、B_1類に比べ口縁部外面に施される横ナデの幅が短いこと。器高が増大し、B_{1a}類から見られた法量減少化に逆行していることから、B_1類と別系統のものC類とし、以降継続していくものとして捉えたい。

以上のことから、朝日西遺跡の供膳形態の土師器は下記の様に推移していくことが推測される。

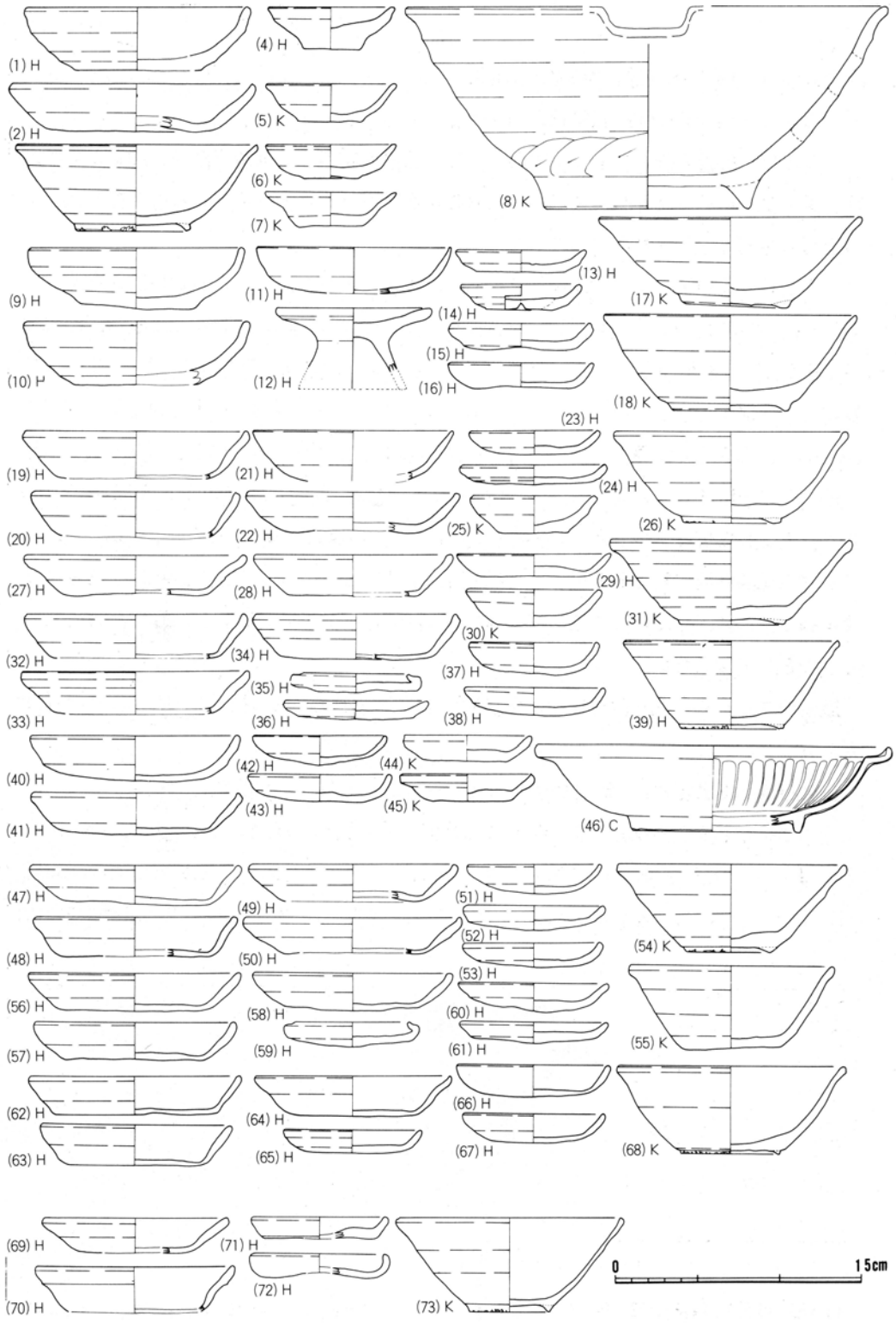
A類→A・B類混在、（B_{1a}類）→（B_{1b}類）→（B_{1c}類）→B・C類混在、（B_{1d}類）

次にこのことを各遺構毎の供伴遺物から検討すると共に、組成の変化を見ていきたい。

A類のみしか見られない遺構として、SK238（朝日西59E）SK13（朝日西59D）（第3図）がある。A類は、大皿、小皿の他、高杯が認められる。出土遺物の中で土



第3図　朝日西遺跡SK238・SK13出土遺物　（H：土師器　K：灰釉陶器、灰釉系陶器　C：中国陶磁）
(1)～(4)SK238(59E)(5)～(10)SK13(59D)



第4図　朝日西遺跡SK65～SK20出土遺物

＊(14)は『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』(愛知県教育サービスセンター)では灰釉系陶器としているがここでは土師器とした。

(1)～(7) SK65 (59G)
(8)～(18) SD25 (59G) SD09 (57・58)
(19)～(26) SK17 (59E)
(27)～(31) SK11 (60B)
(32)～(39) SK235 (59E)
(40)～(46) SD72 (59E)
(47)～(55) SK35 (59E)
(56)～(61) SK233 (59E)
(62)～(68) SK10 (60B)
(69)～(73) SK20 (59C)

師器の占める割合はきわめて少ない。供伴遺物として、ＳＫ238には底部に回転糸切り痕を残す等、灰釉陶器末期の特長を示す椀、土師鍋が見られ、ＳＫ13では高台に籾殻痕が認められない灰釉系陶器椀と小椀、褐白色で軟質な胎土を持つ皿等が見られる。窯編年から、これらの陶器類は11世紀後半から12世紀前半に比定できる(11)。

Ａ・Ｂ類が混在する遺構として、ＳＫ65、ＳＤ25（第４図）（共に朝日西59Ｇ）がある。Ａ類は、大皿、小皿、高杯といった組成であり、Ｂ類は、大皿、小皿しか見られない。量的にはＡ類がＢ類を凌ぐ。供伴遺物として、灰釉系陶器椀、皿、片口鉢が見られ、灰釉系陶器の皿は、いずれも底部がやや突出しており、高台の名残りが見られる。窯編年から12世紀後半代に比定できる(12)。

B_{1b}類が見られる遺構として、ＳＫ17、ＳＫ235、ＳＤ72、（以上朝日西59Ｅ）、ＳＫ11（朝日西60Ｂ）（第４図）がある。Ａ類が消滅し、Ｂ類の組成が完成する時期と考えられる。組成はB_{1b}類を中心とする大皿２種と小皿３種からなる。Ｂ類の組成は以降根本的に変化はない。又、量的に土師器が増大する傾向が見られる。なお、B_{1a}類に見られた赤色粒を含む胎土を持つものが見られなくなる。供伴遺物は、灰釉系陶器椀、皿、青磁皿、石鍋が見られ、灰釉系陶器の編年から、13世紀前半から13世紀中葉に比定できる(13)。

B_{1c}類が見られる遺構は、ＳＫ35、ＳＫ233（共に朝日西59Ｅ）、ＳＫ10（朝日西60Ｂ）（第４図）がある。基本的には、ＳＫ17、ＳＫ235等で見られた組成と同一組成をなす。Ｂ類の中で白橙色の胎土を特つものが減少する。供伴遺物は、灰釉系陶器椀、皿が見られ、灰釉系陶器椀は無高台のものと高台を持つものが混在する。窯編年から13世紀後半から14世紀初頭に比定できる(14)。

B_{1d}・Ｃ類が見られる遺構は前述したＳＫ20（朝日西59Ｃ）（第４図）がある。供伴遺物は、美濃系の灰釉系陶器椀が見られ、その特長より14世紀中頃に比定できる(15)。

このように、供伴遺物から見てもＡ類からＢ類へ、Ｂ類の中でB_{1a}類からB_{1d}類・Ｃ類への推移は妥当であることが判明した。そこで下記の様に時期を設定する。（第５図）

Ⅰ期　Ａ類のみしか見られない時期（11世紀後半～12世紀前半）

Ⅱ期　Ｂ類が見られる時期で、さらにⅡ$_1$期からⅡ$_3$期までに細分される。

Ⅱ$_1$期　Ａ・Ｂ類が混在する時期。（B_{1a}類：12世紀後半代）

Ⅱ$_2$期　Ａ類が消滅し、Ｂ類の組成が完成する時期（B_{1b}類：13世紀前半～中葉）

Ⅱ$_3$期　B_1類の中でB_{1c}類が出現する時期（B_{1c}類：13世紀後半～14世紀初頭）

Ⅲ期　B_{1d}類とＣ類が混在する時期（B_{1d}類：14世紀中葉）

4　まとめにかえて

朝日西遺跡の供膳形態の土師器の様相について整理すると次の３点に要約される。

１．11世紀後半から12世紀後半まではロクロ成形の土師器が主体を占める。

２．非ロクロ成形の土師器は12世紀後半に出現し、12世紀代まではロクロ成形の土師器と混在するが、13世紀以降、非ロクロ成形の土師器のみで供膳形態が構成される。

３．14世紀中頃以降、Ｂ類以外にＣ類が出現するように、非ロクロ成形の土師器に変化が見られる。

以上、朝日西遺跡の供膳形態の土師器について、他地域の土師器との対比、法量変化等をもとに、Ⅰ期からⅢ期の時期区分を試みた。形態や調整等の変化に乏しいため、法量変化に頼りすぎた嫌があるが、概ねの推移は捉えていると思う。しかし、Ｂ類については、本稿で十分に触えなかったB_1類以外の土師器の分析が残されている。またＡ類にしても供伴遺物から、さらに細分ができる可能性がある。等々、課題は山積み状態である。これらの課題を一つ一つ解き明していく必要があり、他の中世遺跡の土師器の様相との検討を積み重ねることで尾張地方全体の中世土師器の様相を解明していかねばならない。

本稿は遠藤才文・赤塚次郎・服部哲也の各氏の他、愛知県埋文センター職員の過激なまでの叱咤激励により、ようやくまとめ上げ得た。また図版作成にあたって鈴木規子氏の協力を得た。文末ながら感謝の意を表わしたい。

〔注〕

(1)　愛知県教育サービスセンター「朝日西遺跡Ⅰ」（『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』1984）
　　愛知県教育サービスタンター「朝日西遺跡Ⅱ」（『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』1985）

(2)　三重県教育委員会三重県斎宮跡調査事務所「斎宮跡の土師器」（『三重県斎宮跡調査事務所年報1984』1985）の中で、後Ⅰ期、後Ⅱ期とした土師器の中に類似したものが見られる。

(3)　田嶋明人「加賀地域に見る10世紀から13世紀にかけての土師器の変遷」（『第４回中世土器研究集会　10・11世紀の土器・陶磁器を中心にして』1985）
　　坂本美夫「甲斐国における古代末期の土器様相」（『神奈川考古第21号　シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題』1986）
　　川上　元「信濃国における古代末期の土器様相」（『同　上』）

(4)　坂本美夫「柱状高台の皿・杯について」（『同　上』）

(5)　注(2)と同じ

(6)　横田洋三「平安末～鎌倉の土師器（京都を中心に）」（『中世土器研究19』1982）で、横田氏はA_2タイプが全国的な広がりを見せることを指摘している。

(7)　横田洋三「出土土師皿編年試案」（『平安京跡研究調査報告　第５輯　平安京左京五条三坊十五町』1981）
　　横田洋三「土師器皿の分類と編年観」（『平安京左京四条三坊十三町　長刀鉾町遺跡平安京跡研究調査報告　第11輯』1984）

(8)　注(1)と同じ

(9)　遺物整理がまだ十分に進んでいないため、完形品に近いもののみの平均値をとった。

(10)　堀内明博「瓦器成立以後の平安京の土器」（『中近世土器の基礎研究』1985）
　　渋谷高秀「紀伊　11～14世紀代　日常雑器類の編年　有田郡を中心にして」（『和歌山県埋蔵文化財情報17』1985）

この原因については土師器のみの型式学的変化として捉えるだけでなく、他の陶磁器類、木製品の供膳形態を含めて検討し、中世社会全体の問題として捉えていく必要があり、これからの課題であろう。

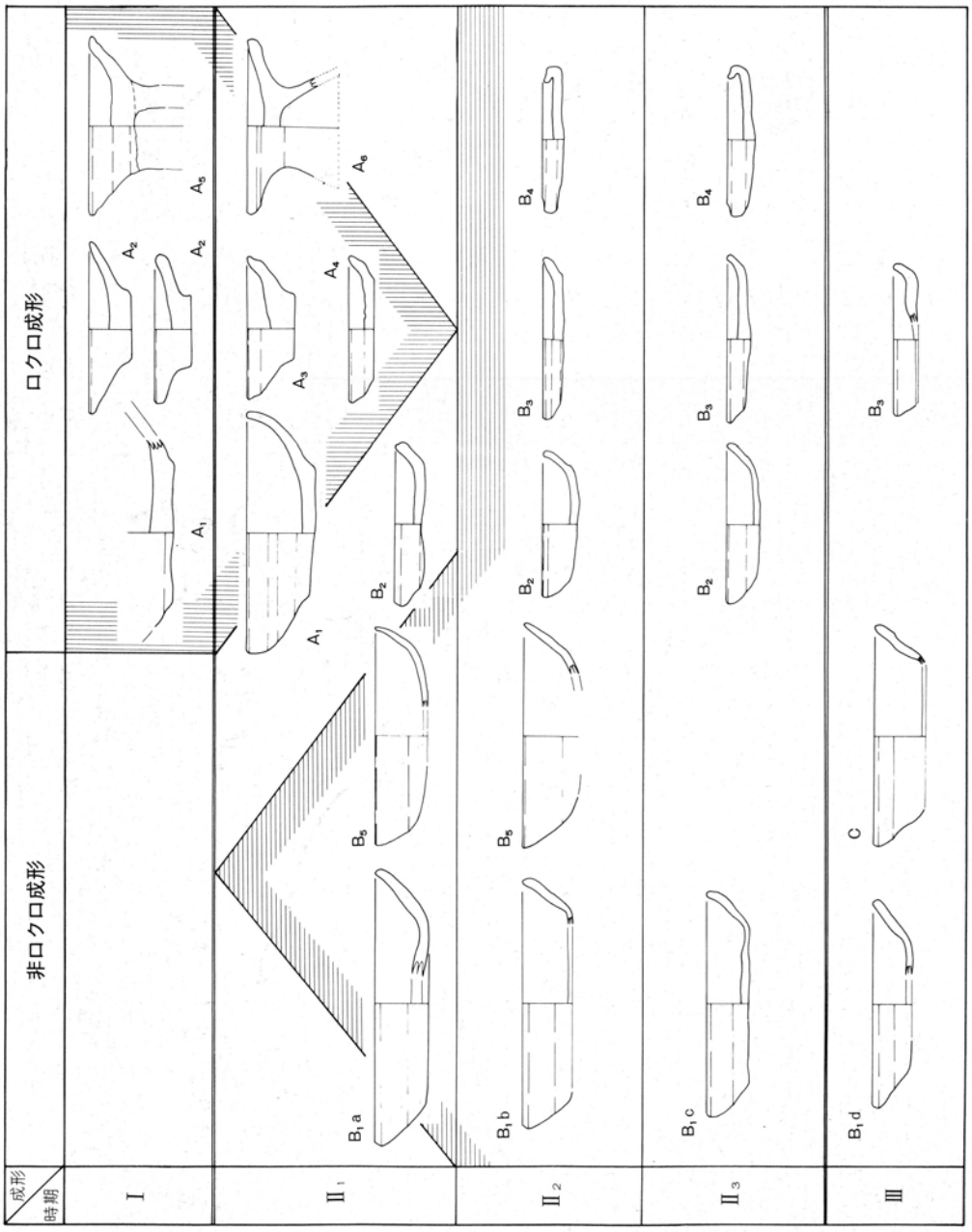
(11)　楢崎彰一「猿投窯の編年について」（『愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅲ』1983）
前川　要「猿投窯における灰釉陶器生産量最末期の諸様相　瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心にして」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ』1984）
藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」（『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅰ』1982）

(12)　藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」（『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅰ』1982）
赤羽一郎（『考古学ライブラリー23　常滑焼　中世窯の様相』1984）

(13)　藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」（『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅰ』1982）

(14)　注(13)と同じ

(15)　田口昭二「美濃窯業史(1)　須恵器から古瀬戸系施釉陶器まで」（『美濃陶磁歴史館報Ⅰ』1981）



第5図　編年試案　　1：4